心得ねばならぬのである、隨て世間で受る輕蔑や侮辱等を、最も嘉すべき物の如く做すに馴れる筈と云ふ事を辨へねばならぬ。

人は此の戰に餘り注意せず、又た餘り重きを置かぬ故、其の結果として既に云ふた通り勝利が困難で、稀で、不完全で、又た持久せぬのが常である。

次に訓告すべきは、我等が大氣力を以て戰はね

ばならぬと云ふ事である。此の氣力は神に願ひさへすれば、容易く求められるのである、若し我等が敵の絶えず憤り憎むのを恐れ、且つ其の大軍なる爲めに震慄ならば、其の時に神の善良と愛とは夫れよりも尙ほ遙に勝つてある事を覺え、又た攻擊する敵よりも、天に於て我等の爲めに祈る天使や聖人の數は、尙ほ一層多い事を想起さねばならぬ。

此の事を思ふてこそ、數多纖弱婦人でも、大なる勇氣を其の心に惹起し、世の權勢や知能に打勝ち、肉慾及び地獄の狂怒をも壓伏せたのである。

假令我等の敵の攻擊が、時として一層激烈になると思はれても、又た夫れが我等の一生涯續いても、且つ一時に多くの方面から、滅亡の憂が來るとも、夫れでも驚くに及ばぬ、今まで述べた道理の外に、心得べき事がある、夫れは我等の敵が幾

ら強くても、又た幾ら巧みであつても、皆な神の權に服するもので、我等は即ち此の神の光榮の爲めに、戰ふのであると云ふ事である。神は我等を甚く重じ、自ら勇しく我等を戰に招き、戰が我等の力量以上に出る事を、決して許したまはず、却て神は我等の爲めに戰ひ、適宜の時、又は我等の爲めに大益ありと思召された時には敵を我等に伏させたまふであらう。故に假令神が敵を伏せしむ

るに、我等の最後の日を待ちたまふとも、始終希望して居らねばならぬ。唯だ神が我等に要求したまふ所の事は、勇しく戰ふと云ふ事と、決して武器を投じてはならぬと云ふ事と、又た假令諸所に負傷するやうな事があつても、決して遁げてはならぬと云ふ事である。

終りに臨んで訓告すべきは、戰を逃れると云ふ事は、出來ぬ事であるから、寧ろ勇しく戰ふの決心

を起した方が可いと云ふ事である。卑怯に戰を逃げやうと思ふものは、屹度自由と生命とを共に失ふに決つてある。

又た夫れに我等の戰ふべき敵たるものは、極めて巧みにして、且つ頻に我等を憎むものであるから、我等は迚も平和も休戰も決して望むべきでない。

第十六章　基督の兵士は拂曉より如何にして

出陣すべきか

我等は早旦目醒るや否や、先づ第一に心の眼を以て、視察すべき事は、我等は果合場にあつて、戰ふか死ぬかの境にあると云ふ事である。

我等は此の時に、最早既往數回防戰して來た敵及び惡き傾向が、眼前に武器を採て、我等を打殺さうとして、嚴然と立て居るが如くに思ひ、右手の方には武勇なる大將耶蘇基督が、其の至聖なる

御母童貞瑪理亞、及び之れが最愛なる淨配若瑟、無數の天使聖人の大軍、就中聖ミカエル大天使と共に在らせらるゝを見、左手の方には惡魔の魁首が地獄の惡魔等と共に合して、我等に邪慾を引起し、敗北せしめやうとして居るのを見ねばならぬ

此の時に聲があつて、我等の耳に聞ゆるが如く思はれるのは、是れ我等の主護の天使の聲で、我等に左の如く云ふのであらう。

看よ汝が今日戰ふべき敵は夫れ此所にあるぞ、汝の心これを怖るゝなかれ、汝力を落す勿れ、恐れ若くは何かの口實を設けて、後へ退くなかれ、我主は近く汝の側に在す、此の神たる大將は其の光榮なる軍隊と共に、汝を保護して敵を防がんとしたまふ、汝恐るゝなかれ、神たる大將は彼等の汝よりも强くして、汝を倒す事を許したまはざるべし、屹然せよ、我慢して打來る攻

擊に反抗せよ、心の底より數次叫聲を出して、我主、聖母、及び諸聖人を援助に呼べ、其の保護に由て勝利を得る事は疑なし、汝は弱くして戰に熟せず、又た敵は强くして多しと雖も、恬然として恐るゝ事なかれ、汝を造り、汝を贖ひたまへる神は、汝を援けて敵よりも强からしめたまはん、然のみらず、神は萬の力に超えて、限なき力を有したまひ、之れに比ぶるものなし

敵が汝を亡さんと謀るよりも、神が汝を援けんとしたまふ望は尚ほ切なり、故に戰へ、苦むに吝なるなかれ、蓋し汝の苦勞、汝の奮勵及び汝が惡き傾向、惡き癖を制するのに覺ゆる苦痛は汝を勝利に導くべければなり。又た汝に大なる寶を得せしめ、此の寶を以て汝は天國を買求め汝の靈魂永遠神と冥合するを得べし」と。

乃で我等は己れを賴まず、神を信賴の武器を備

へ、忠實に祈禱を務め、練習に注意して、神の名によつて、戰を初めねばならぬ。是非とも打伏る筈の彼の敵、彼の傾向に打て蒐らねばならぬのである。既に定めた順序に從ひ、時に反抗を試み、時に憎む念を起し、又た時に反對の德の業を爲ねばならぬ。我主は其所に在し、戰を見たまふのである。我主は在天の凱旋教會と共に、我等を眺めて居られる故、敵を我等の足下に倒れるまで打擊

して、在天の方々を歡ばせねばならぬ。

尙ほ累て謂ふ、我等は皆な神に事へ、神の聖意に適ふやうに務むべき義務のあるのを考へるならば、戰を吝んではならぬ、若し戰を避けるならば其の場で打殺されるを免がれぬから、戰の必要を心得る筈である。尙ほ重ねて云ふ、若し我等が反逆者の如く神の陣營を棄てゝ、世間と肉慾の快樂とに身を委ねて見やうかと、試に思ふ樣な事があつ

たならば、是れ實に恥しさの至りであつて、なほ〳〵戰を免る事が出來ず、非常の困難を嘗めて屢ば額に汗を流し、心が死ぬ程の苦に捕られるに至るであらう。

然らば何卒現世では非常なる苦勞苦痛を帶びて尙ほ將來に一層激烈苦痛と永遠の死を招きながら軈て果つべき苦痛にして、神の終なく限なき快樂を得せしむべき苦痛を避けるのは、如何ほど愚で

あるかと云ふ事を、能々考へよ。

第十七章　邪慾と戰ふに守るべき順序

適當に戰ふ爲め、守るべき順序を、能く心得る事は極めて大切である。數多の無暗なものが、茲に氣を附けずして、偶然一時の發心を以て戰ひ、遂に亡びてしまうのと、同じやうにしてはならぬ乃で我等が敵及び惡き傾向と戰ふに當つて、守るべき順序と云ふのは、左の通りてある。

先づ第一自己の心中に立入り、綿密に之れを調べ、如何なる思、如何なる情に、我が心が引込まれて居るか、又た如何なる情慾が之れを所有し、之れを司配して居るかを考へ、特に斯の如き者に向て、武器を採て戰はねばならぬ。

又た若し他の敵が現れ來て、我等に反抗すれば我等は現在仕蒐て、近く我等と戰ふて居る敵を先づ相手取て、夫れから他の者と戰はねばならぬ。

第十八章　情慾突然の激發に反抗する方法

我等が未だ侮辱、若くは其の他の反對の攻擊を忍ぶに馴れて居らぬ間は、之れに馴れる爲めに、先づ務めて之れを前以て見込み、次に意志の度々の行動を以て之れを望み、心に能く覺悟して、待受けるやうに爲ねばならぬ。

之れを前以て見込む方法は、己が情慾の狀況を考へた後、我等は如何なる人と交る筈、如何なる

場所へ行く筈と云ふ事を考へれば、又た如何なる事が起りさうであるかと云ふ事を、容易く推測る事が出來る。

併し茲に目下我等の、思ひも寄らぬ反對が起つて來ると假定むれば、此の時は我等が前以て見込んだものに對して、覺悟した方法の外に、尙ほ又た左の方法を、使用しても宜い。

我等が侮辱、若くは其の他の反對の刺擊を、感

じ初めるや否や、我慢して、心を神に取揚げるやうに爲ねばならぬ、而て此の反對を、我等に遣はして下さるを以て、神の示したまふ仁愛の程を、考へねばならぬ。何故なれば此の反對を與えられたのは、神を愛するによつて之れを堪へさへすれば、心を清め、神に近き、神に冥合する道となるからである。

我等が此の試を忍ぶのは、神の思召であると云

ふ事を確と認めて後、我れと我が心に立戻り、己れを諫めて、心の中に斯う語らねばなぬ「嗚呼、我れ爭で此の十字架を擔ふを厭ふべきや、我れに之れを下せるものは、人間にあらずして、天に在す父であるものを」と云ひ、次に十字架に身を向け、出來るだけの堪忍と歡喜とを以て、之れを抱き、又た斯う云はねばならぬ、「嗚呼、未だ我れの生れざる前より、神の攝理を以て、備へられた

る十字架よ、之れに釘けられたる神の甘味なる愛によりて、甘味となれる十字架よ、願くは今我れをして、汝に釘け且つ汝の上に死して我れを贖へる神子に、身を献げしめたまへ」と。

若し最初に情慾が我等を支配して、我等の精神を神に向る事も出來す、亦た傷けられて地に倒れた儘なるとも、切て出來る丈け早く起上らんことを力め、恰も負傷せざるが如き心持でなければな

らぬ。

併しながら此の突然の激發に對して、効驗ある藥餌は、成る可く速に、其の原因を取除く事である。

假令ば我等が或る物に對するや、情念が直に之れに引かされて、其の物の顯れ出るや、忽ち精神が亂れると云ふやうな時には、之れを用心する法は、勿論一時の事であるけれども、其の原因たる

ものを、取除くより外にない。

然し此の精神の亂れは、物より來るのでなくして、人より來り、即ち我等の厭な者で、其の僅の行爲でも、我等の氣に觸つて、五月蠅と思はれる人より來るとすれば、此の時に採る可き法は、其の人を愛し寵むやうに務めるのである。左樣する筈でないか、其の人と雖も矢張我等の如く、神の聖手に造られ、又た其の聖血で、贖はれた人であ

るのみならず、我等が若し此の人をも利用するを知れば、我等は之れが爲めに、畏くも誰に對しても親切にして柔和なる我が救主に、似るやうになる機會を得るのである。

第十九章　邪婬の罪惡と戰ふ方法

邪婬の罪惡と戰ふには、他の情慾に對するのと全く異なる一種特別の方法を用ひねばならぬ。

乃で我等は此の戰に於て、順序を立る事を心得

る爲め、誘惑の前中後の三の時を區別せねばならぬ。

先づ誘惑の前には、常に之れを惹起す機會となるものに向て、戰はねばならぬのである。

第一此所には、此の惡に向て直接に戰ふては否けない、出來る丈け我等を危險に陷れるやうな凡ての機會、凡ての人を避けるやうに爲ねばならぬ

併し然う云ふ機會、然う云ふ人に逢ねばならぬ

時は、出來る丈け短く、又た謹慎の顏面を以て、交らねばならぬ。斯る時は我等の言語を、優く情の有る調子にする塲合ではない、寧ろ之れを嚴格にする筈である。

我等は感覺の萌をも感せず、又た多年之れに觸れた覺えもないからと云ふて、自分の力を賴にしてはならぬ。此の咀ふ可き罪惡は、多年行はぬ事をも、一時にして行はしむる事があると知らねば

ならぬ。屢ば其の何も行はずに居る時は、窃に武備を爲て居る爲めである。人が些も其の狡猾に氣附ずして、彼れは恰も友の如き容を巧に粧ふて居るほど、夫れほど其の打撃が恐しく、其の傷が癒され難いのである。

數度經驗が之れを證明した、今尚日々證明しつゝあるが、最も大なる危險は、許された事と云ふ口實の下に、行はれる交際から出て來る事を。假

令ば家庭の務を盡すとか、義理を盡さねばならぬとか、又は交際する相手は、德の勝れた人であるから、大丈夫であるとか云ふ樣な、口實の下に於てゞある。斯る交際を幾度も續けて、用心せぬ時には、感覺の有毒な誘引が、善い意向に混り來て漸々と知らず識らずの間に侵入し、心の眞髓まで染込んで、益す理性を眩ましてしまふのである。不用心な者は、一番危險な事、即ち愛らしき目つ

きだとか、情の温い語だとか、談話の面白味だとか云ふ樣な事を、何とも思はず、無頓着にして居る、斯て危險より危險に進み、遂に手强い失墜を招き、少くも苦しく打勝がたき、何等かの誘惑に陷るやうに成るのである。

茲に重て云ふ、逃るが第一である。些少な火粉でも、我等を燒盡す事が出來る。詫語に、我れは根氣が强い、意志は堅く一定して居る、又た神に

背かんよりは、寧ろ死を欲する心事である等と云ふ勿れ。其所が用心所で、色慾の火は此等の交際の中に漸次入來り、我等の善き決心を枯し、又た我等の夢にも思はぬ時、我等の意志を虜にして了ふて、終には親族の緣も、友誼も、神を畏れる事も、名譽も、生命も、地獄の萬苦も、何をも省みぬやうに成るであらう。

第二には閑居を避けねばならぬ、何時も用心し

て我等の身分に相當な、思や業に身を委ねる事を知らねばならぬ。

第三には決して我等の上長者に逆ふてはならぬ却て優しく之れに服從し、其の命ずる所の事、特に我等の見下げられたやうな事、又た直接我等の意と、性來の傾向に反する事を、速に行ふやうに爲ねばならぬ。

第四には漫りに他人を批評してはならぬ。就中

邪婬の事柄に於て然うである。假令他人が明瞭に過失に陷ても、之れを憫んで、決して輕蔑するな。又た決して夫れを嘲らず、寧ろ之れを機會として自ら謙り、己れを知つて、眞心から、我等は塵埃に過ぎぬものである、何にも成らぬものであると云ふ事を、自白せねばならぬ。祈禱を以て益す神に近き、既往よりは一層忠實にして、危險の影をも避けねばならぬ。

若し我等が直ぐ他人を批評して、之れを輕蔑するならば、神も亦た我等を相當に罰したまふであらう、即ち我等も同じ罪に陷るを措いて、第一我等の傲慢を認めしめ、次に我等を謙らしめ、終に我等の過失と自負とを、矯正さしめるやうに爲たまふであらう。

又た假令我等は幸に罪を犯さずして、永く我等の決心を忠實に守つたとても、夫れでも我等は我

等の身に全く安心は出來ぬ事を、心得ねばならぬ

第五假令我等に、神が何歟の賜を與へ、精神的快樂の嗜好を、授けて下さるとも、之れが爲めに空しく滿足して自分を何かであると、思ふては不可ない。又た既に敵を眞に唯だ否やがつて、夫れを忌嫌ふ外はないと云ふても、以後は戰を引起し得る敵なしと、思ふてはならぬ。若し我等が此の點に就て、自負するならば、夫れは屹度何歟の失

墜を招くに相違ない。

誘惑の中には先づ第一に之を引起した原因が、内部的であるか、將た外部的であるかを見ねばならぬ。

外部的原因とは、假令ば好奇に見たり、聞いたりする事、華美な衣服、邪婬に導き易い癖、談話等を指して云ふのである。

斯る場合に用ふ可き藥餌は、自ら扣へて身を愼

む事である。凡て我等は邪淫の危險に陷らしむべき事物より、我等の目及び其の他の感官を避けて而して前に云ふた通り逃げねばならぬ。

内部的原因とは、感覺の激發、過去の罪より殘れる思念記憶、又は惡魔の勸誘等である。

感覺の激發を打殺すには、斷食、鞭韃、毛衣、不眠、及び之れに類する贖罪の業を以てするのであるが、併し之れを爲すに、何時も適度と從順と

を守らねばならぬ。

邪念に至つては、其の何れより出で來たれるに係はらず、之れを防ぐ爲めに、採るべき方法は二個である。即ち左の如し。

先づ第一我等の職務の、種々の修業に身を委ぬる事。

第二は祈禱と默想とであるが、祈禱は左の方法によつて行ふべきものである。

此の邪念の萌でもあると感ずるや否や、直に我等の精神を、十字架上の救主に向て、斯う云ふのである「嗚呼耶蘇、我が甘味なる耶蘇よ、速に來りて我れを援け、我れをして此の敵に負けざらしめたまへ」と

或る時は又た我主の懸りたまへる十字架を懷き其の聖き足の傷を接吻し、愛々敷語て「光榮なる傷、貞潔なる傷、聖き傷、願くば今我が賤く憫な

る心に附き、我をして決して主に背く事を得ざらしめたまへ」と云ふが宜い。

肉體の快樂の誘惑が、殊に激く精神を惱す時、或る書物に記す所に據れば、之れを防ぐが爲めに此の快樂の耻しくなる事、其の飽足ぬ事、其の厭な事、其の結果の苦き事、又た利益をも、生命をも、名譽をも、危險及び滅亡に至らしむる事などを觀想するやうに務める事を勸めるけれども、此

の說は餘り贊成が出來ぬ。

此の方法は必ずしも、誘惑に打勝とは云はれぬのである。時としては却て危險になる事もある。勿論惡念を追拂ふ積りであらうけれども、其の惡念の樂を起し、隨て此の樂を承認する機會と危險とを來たす事がある。夫れであるから最も良き方法は、全く逃げる事である。啻に此の惡念のみならず、凡て之れを引起す樣な思、假令反對の德ら

しく見ゆる思をも避けるのが本統である。

故に此の時に我等の從事すべき最も良き觀念は我主耶蘇基督の御生涯と、御苦難との觀念である

此の觀念の時すら、幾ら我等の意力を盡しても尙ほ此の惡念が現れ出て、常よりも一層我等を惱す事があつても、決して不思義な事のやうに驚くに及ばぬ。又た之れが爲めに觀念を止めてはならぬ。此の惡念に打勝うとしてゞも心を之れに懸け

ず、出來る丈け精神を籠て、其の觀念を續け、又た我等を苦しましむる想像に氣を付けずして、恰も無き物の如く做さねばならぬ、縱や夫れが絕えず我等と戰はんとて剛情張ても、之れに抵抗するには、今述べた道に勝るものはない。

我等が其の觀念を終る時、左の願を、若くは之れに類する願を、爲ねばならぬ「嗚呼、我れを造り、且つ贖ひたまひし神よ、願くは主の御苦難に

對し、又た云ふに云はれぬ御憐愛によつて、今我れを迫りつゝある危險より逃れしめたまへ」と斯う云ふて、誘はれつゝある邪婬の事に、氣を留めてはならぬ。何故なれば之れを記憶するだけでも危險になるからである。

加之、我等は此の誘惑に承知したか、否かを知るが爲めと云ふて、之れを考へる事をも避けねばならぬ。此の口實の中にも、惡魔の囮がある。

彼れは我等を慮憂さして、心細く且つ小膽ならしむるやうに務め、或は又た我等に、此の心遣ひを續けさして、若しや惡き樂を承諾するやうに、陷らせる事が出來やうかと、希望して居るのである

此の故に我等が愈よ承諾したと知らぬ時は、斯る事に就て、知つた丈けの所を簡單に聽罪師に言顯すを以て、足ると爲ねばならぬ。其の上聽罪師の意見に從ひ、最う其の事を考へも爲ずに、安心

して居らねばならぬのである。

併し聽罪師には、我等の思念を殘らず打明す樣に、務め、決して恐怖や、辱耻の爲めに、差扣えてならぬ。

若し我等が都ての敵に打勝つ爲めに、謙遜が必要ならば、此所こそ謙遜の仕所である、何故ならば、此の種類の罪惡は、殆ど何時も傲慢の罰であるからである。

誘惑の後には、全く脱れた、大丈夫であると思ふても宜さゝうにあるけれども、然うばかりは云はれぬ、我等の爲めに、危險の機會となつたものは、始終之れを避けねばならぬ。德の爲めとか、或は又た何の善の口實を以て、避けずとも宜からうと思ふやうに成るかも知れぬ、夫れを能く用心せねばならぬ。夫れは腐敗した性質の迷想である狡猾な敵の囮である、此の敵は我等を暗黑へ引落

さん爲めに、光明の天使に變ずるのである。

第二十章　怠慢に打克つ方法

怠慢は啻に完德に進むに反抗する障碍であるのみならず、我等を敵の勝手氣儘に任せる事もある斯くして哀れな奴隷と爲られるのを免れるには、先づ凡て好奇や、餘り人情に流がれる愛着や、身分に不相應な仕事を避けねばならぬ。

其の次に總て受る所の良き勸に、成る丈け早く

應ずるやうに、又た上長者の命令は皆な其の時々に、且つ上長者の意に適ふ方法によつて、之れに從ふやうに、力を籠めて、務めねばならぬ。

命ぜられた事を行ふに、少しも延引してはならぬ、一の延引は二の延引を生じ、二の延引は三の延引を生じて、漸々延引が、重つて來るものである。後に勝つよりは、初に勝つ方が易い、怠慢の萠した時に抵抗せざれば、夫れが樂となつて、益

す弱くなる。斯の如くにして、遂に時機が後れてから初出すか、或は何事も皆な厭になつて了ふて之れを打捨るやうになる、又た斯の如くにして、漸次と怠慢の癖が附いて來るのである。義務が我等に要求する時、之れに從はざるは恥であると、我等は能く之れを感ずるけれども、夫れでも罪すべき怠慢に流れ、勉勵して精確に爲る事を、後廻にして、終に自然の傾向に從ふて了ふのである

此の怠慢は何事にも入込んで來る、其の毒は唯だ意志に感染して、働を厭がらせるのみならず、知識をも暗ますものである、現に好で怠慢に全く身を任せ、或は何時も何時も、義務を行ふ事を後廻にしながら、後日屹度勉勵して、速に行はう抔と云ふ決心は、如何ほど空漠にして、根據なき事であるかを、知らぬやうになる。

併しながら爲すべき事を、速に行ふばかりでは

足らぬ、完全に達する爲めには、出來るだけ尙ほ其の上に、之れを義務の性質の要求する時刻に於て、又た之れに適當する勉勵の心を以て、行はねばならぬ。

義務を時刻より早く行ふのも、又た念を入れて好くすることを思はず、一刻も早く片付てしまをうと爲すのも、決して勉勵と云ふものではない、却て狡猾な怠慢と云はねばならぬ。何故なれば其

の時の目的は、出來る丈け早く、休まうと云ふ事であつて、夫れが爲めに、急いで行ふのであるから。

世の不秩序の出所は、怠慢によつて起る障碍と困難とに打勝つ堅き決心を以て善業を其の時刻に行へば、其の善業は如何ほど價値あるかを、考へぬからである。我等は度々此斯記憶せねばならぬ一度精神を神に引揚げる事でも、又た之れを尊ぶ

が爲めに、一遍跪く事でも、世界の萬の寶にも、勝れる價値がある、又た己れ或は邪慾に打勝つ度毎に、天使は天より我等の心に、勝利の榮冠を携へ來るものであると。

之れに反して、神は怠慢者には、之れに與へた恩寵をも漸次引取り、之れを以て、其の忠實な下僕を富ましし、後日に之れを樂しき天國へ、入れるやうに爲たまふのである。

若し最初に苦辛と困難とが恐ろしく見えて、迚も勇ましく之れに向ふ力がないと感じる程であるならば、務めて之れを覆ひ包み、怠慢者に見ゆる程には、己れに取りて恐ろしく見えぬと云ふ樣に爲ねばならぬ。

假令ば我等が一の德を求めんとすれば、此の事業は巨多の業を以て、自己を錬習する事を要し、長き日の間に、中々骨折らねばならず、又た戰ふ

べき敵は數多く、且つ力強く見えるゆゑ、先づ此の德の業を行ふに當つて、其の數は僅であるとして初めねばならぬ。之れに着手するに僅の日の間勞すれば宜いと思ふやうに爲ねばならぬ。又た出て來る敵と戰ふに、相手は唯だ是ればかりであるとして、神の祐さへあれば、我等は凡ての敵よりも、强からうと確信せねばならぬ。

此の如くにすれば、怠慢は我等の中に弱く成り

遂に何事も都合よく成つて、反對する德が、漸次怠慢と入交るやうに成るであらう。

亦た默禱に就ても、之れと等しき次第である、假令ば我等が一時間默禱の修業する時には、我等の怠慢に取りては、是れでも大變である。此の時に我等は、先づ十五分間だけ默禱する事を力め、又た十五分間を加ふる事は容易くなつて、遂に一時間默禱するやうに成る。

併し其の第二の十五分間、又た其の次の十五分に於て、打勝ちがたき反對とか、或は何か困難な事が出來したならば、其の時は厭倦を避ける爲めに、默禱を中止して、後に復た再び、之れを續けるが宜い。

又た或は課業が澤山あつて、怠慢の爲めに之れが餘り多く且つ六かしく見えて恐ろしく思はれる時にも、亦た右の通りに仕かゝらねばならぬ、先

づ其の一個を勇ましく平氣で仕かゝり、是れの外には何も爲る事がないやうに思ふて爲るのである夫れから此の第一の業を行ふた時の熱心を以て、其の餘の業を行ふならば、我等の怠慢によつて想像するほどの困難はない。

若しも既に記した方法と異なるものを採つて、疲勞困難の生じ來るものに、打勝つのを否むならば遂に怠慢に負けて、啻に德を行ひ始める當座に

起る實際の辛苦と困難とを、恐るゝばかりでなく其の辛苦と困難とのない前から、早や遠くより將來を豫想して、憂慮と倦怠とを生じ、始終敵の攻擊を恐れ、何樣な些細な場合でも、何か困難のやうに思ひ、又た攻擊のない時でも、最も激き憂慮に取付かれるであらう。

尙ほ其の上に知るべき事は、怠慢の隱秘な毒は啻に德の習慣を生ずべき初めの、最も小き根を枯

らすばかりでなく、既に求め得た他の德の習慣をも枯らすことがある。恰ど草木の水液を吸ひ盡す虫の如く、怠慢は靈生の骨髓を、知らず識らずの間に嚙り盡すのである。惡魔は怠慢の囮を、萬民の歩く道に掛くると雖も、靈生を守らんとする人には、別して之れを掛けるのである。

故に何卒用心して祈禱を務め、善業を行はねばならぬ、天夫を出迎に行くのは、粧飾を爲て居ら

ねばならぬから、成る可く早く（愛德の業を勵んで）婚禮の衣裝を準備せねばならぬ。

我等は毎日如斯記憶せぬばならぬ、神は朝を與へたれど夕を與ふる約束なしと、又た晩に至りては翌日までに至るや測りがたしと、隨て時々刻々神の聖意に應じて働き、今の時刻が早や最後の時刻であるが如くに、爲ねばならぬ、就中我等は一生涯の時々刻々に就て、嚴密な調査を差出さねば

ならぬのであるから、尙ほ更ら然うである。

終りに臨んで最う一つ此の點に就て、注意を促したいのは、若し我等が一日に於て、我等の惡き傾向及び我等の我意に數回の勝利を得ず、又た救主に對して、其の恩惠、殊に我等の爲めに、自ら忍んで下さつた御苦難を感謝せず、亦た我等に患惱の測られぬ程の寶を、分配して下さつた甘き親心の懲戒に就ても感謝せず、此等の義務を全く遂

行はなかつた日は、假令其の間に巨多の事を行ふたと思ふても、其の一日を損したのである。

第廿一章　外感を治むる法、及び之れを神事の觀想に利用する法

外感を能く治むるには、注意に注意を加へて、大に勉勵せねばならぬ。感覺的嗜慾は、我等の腐敗せる性質の、大將のやうなもので、快樂と五官の滿足とを求むるに、非常に傾向て居るから、自

分ばかりでは、此の目的を達する事が出來ぬ故、五官を己が兵卒の如く用ひ、之れを己が自然の機關の如くにして、夫々目的の物を捉へさすやうに爲る、就中感覺的想像を使用し、之れを我が物の樣にして、精神へ銘刻するのである。想像の末には快樂が起り、快樂は肉慾と密接の關係があるから軈て快樂を受け得る性のある感覺的部分に普く行渡るのである。斯の如く靈魂の上にも、肉身の上

にも、同じ様に感染を及し、靈肉に己が腐敗の毒を吐きかける

其所が危險であつて今や其の預防法を示さねばならぬのである。

先づ我等は何時でも、五官を恣にさしてはならぬ、五官を使用するのは、善き目的、有益、及び必要の爲めにして、決して樂の爲めにばかりしてはならぬ。若しも五官が、我等に不意を喰はし

て、行過ぎたと思はゞ、直に之れを引戻すやうにするか、若くは之れを好き方向へ誘導して、賤き快樂に閉籠られる代りに、其の五官に係る事物を利用して、靈魂を富ます方法を採らねばならぬ。

其の時に我等は、我が心に立戻り、聖寵の羽を借て觀念しつゝ、心を天に上げるのである。乃で我等の之れが爲めに、執るべき方法は斯うである。

何事によらず、被造物が五官の一に係た時は、

被造物其物と、其の中に在る精神とを、分けるやうに考へ初めねばならぬ。被造物其物としては、我等の五官に感ぜしむるものを、何も持つて居らぬ、彼れは全く皆な神の業である。神は其の精神と同時に、其の現存する事、其の善き事、其の美なる事、又た其の中に在る凡ての得點をも、見えずながら與へたまふのであると云ふ事を考へねばならぬ。而して我等は神のみ萬物に在る諸の美善

の造主、本原にして、此等の美善は悉く御自分の中に限なく兼ね合せ在らせらるゝ事を見て、大に喜ぶ筈である。此等被造物の美善は、皆な之れ神の無限なる美と德との、不完全な發表に過ぎぬものゝやうに、我等の目に映るであらう。

我等の精神が被造物の特質に感じて、其の感嘆に取られて居ると認めたならば、心中秘窃に其の眞實に虚無なるものであると云ふ觀念を浮べるや

うに注意し、就中無上至尊の造物主が、其の被造物の中に顯れるが如く、之れに存在を與へたまふたのであると云ふ事の觀念に、意を注がねばならぬ。然うすれば神のみを樂にして斯く云はん「嗚呼無限に愛望すべき神の本性、是れのみ萬物無限の本源にて在すとは、我れに取りて何よりも愉快なる事である」と

之れと同じく木や花や、其の他の美を極めた天

然物を見た時は、見えざる神に我等の精神を引上げ、神は此等に其の自ら有つて居らぬ生命を與へ其の力ばかりで之れを活かしたまふのであると考へ、斯く云ふが宜い「嗚呼是れぞ眞正なる生命の存する所、萬物の生存し、發育するは皆な神に因て、神にあつて、又た神の爲めである、嗚呼神の聖意、是れのみ我が生涯の歡喜なり」と

無知の動物も亦た是れ我等の心を神に引上げる

機會と成るものである。我等は神が之れに感覺を與へ、運動を與へたまふを見て、斯く云ふが宜い

「嗚呼萬物の元主、萬物は皆な主の周圍に動けども、主のみ不動なり、我が神よ、斯く主の不動不變を觀想するは、我れに取りて幸福なり」と

我等が被造物の美に引取られると覺へた時は、速に、其の見える所のものより見えぬ所の精神を引分け外部に顯れる凡ての美は、皆な是れ見え

ぬ精神より出で來るものであつて、是れのみ五官に觸るゝ凡ての德の造主であると考へ、歡喜に滿てる心を以て斯く云はん「嗚呼是れぞ造られざる泉より流れる小川なり、此の美は萬美の限なき大海の一滴に過ぎず、嗚呼我れは造られたる凡ての美の原因、且理由なる無始無終廣大無邊の美を考ふれば、心中歡善に耐へざるなり」と

他人の中に仁慈、賢明、正義、及び其の他の善

徳を認むる時にも、矢張前章に記したる通りに分別して、神に向て斯く云はん「嗚呼限なき萬徳の寶藏に在す神よ、善徳は皆な主より、又た主によつてのみ出で來る、自餘の物は主の盛徳に比すれば、數ふるに足らず、我れは之れを見て、愉快に耐へざるなり、主よ我れは主の我が倫人に賤與したまへる美徳に就き、主に感謝し奉る、願くは、主よ、今や我が徳に乏しきを見そなはし、斯々の

徳の大なる欠乏を憐みたまへ」

又た何か手業を始めやうとする時、神は此の業の元主である我等は唯だ其の全能の活る器械に過ぎぬと考へ、我等の思を神に引上げて斯く云はん

「萬物の最上主、我れ主に頼らざれば、何事をも行ふ能はずして、主が萬物の大本原主なるを認め大に喜び奉る」と

食物を喰る時は、神が味を之れに與へて下さる

と考へ、神のみを樂にして、斯く云はん「嗚呼我が心喜べよ、汝の神の外に眞正の樂あらざる如く何時も如何なる所にも、神に於てのみ樂を味ふ事を得るなり」と

若し我等が感覺に適する香物を樂むならば、其の樂のみに心を止めずして、尙ほ思を神に引上げ神は萬香の出て來る本原にて在すと考へ、此の觀念を喜びつ、心の底より斯く云はん「主よ、我れ

香氣は皆な主より出で來ると思へば喜びに耐へず糞くば吾心地上の凡ての快樂を脫し、主の尊前に上りて香しき匂りを發するを得しめたまへ」と。

歌等の好き調子を聽くならば、精神を神に引上げて、斯く云はん「我が主よ、我が神よ、主の無限の美德を見るは、我れに取りて何たる愉快ぞや啻に此の如く集合して、主に於てのみ天の好き調子を呈するのみならず、此の好き調子は、天に於

る天使の合奏に於ても聞え、又た萬物は之れを珍しき合調に於て再び呈す」と。

第廿二章　被造物が耶蘇基督の生涯と苦難との玄義を觀念する機會を與へ、我等の五官を導く法。

既に五官に觸れる事物が、如何に我等の精神を引上げて、神の盛德を觀想する機會となるかを示した、今や我等が五官を利用して、耶蘇基督の御

生涯と、御苦難との奥義を、觀念する方法を、學ばねばならぬ。

萬物は皆な此の目的の爲めに、用ふる事が出來る、先づ第一前に述べた如く、萬物に於て無上至尊の神を、其の大元主にして、之れに其の在存、其の美、及び其の特質を與へたまふたものであると考へねばならぬ。次に神の仁愛は如何ほど大きく、且つ限なきものであるかを感嘆せねばならぬ

神は萬物の本原にして、且つ其の大主であるにも拘ばらず、自ら謙つて人となり、人間の救靈の爲めに苦しみ、死ぬる事をも否みたまはず、又た御自分の手の業なる人々が反抗して、之れを十字架に針けることを、許したまふのである。

此の御苦難の玄義が、格別我等の心の眼に著しく顯れるのは、武器、繩、鞭、柱、荊蕀、葦、釘、鐵槌、及び其の他の御苦難の時に使用せられた器具を見る時に於てゞある。

賤き家を見ては、救主が御誕生あそばした厩と馬槽とを思出し、雨が降れば橄欖の園に於て、基督の全身より流出でゝ地を潤した血の汗を覺え、岩石を見ては御死去の時に裂けた岩石を追念し、地を見ては彼の時に震動したのを思起し、太陽を見れば其の時に暗んだのを考出し、水を見れば救主の脇腹より流出たのを想起し、其の他の事も凡

て皆な此の通りである。

酒、及び其の他の飲料を飲む時は、耶蘇基督が飲ませられたまふた酸と苦膽とを思出す。

薫物の香ばしきが、我等の感覺を喜ばす時には

マグダレナが基督の足下に平伏して、之れに價高き香油の器を割り、涙と共に注いだ事を思出す事が出來る。

衣服を着る時は、天主の聖子が其の神性を以て

我等を覆はん爲めに、人の肉身を着たまふた事を考へ、衣服を脱ぐ時は、耶蘇が衣を剝がれて裸体にせられ、我等の爲めに苛責を受け、磔刑の苦を忍びたまふた記憶を呼起すが宜い。

群衆の叫や騒が聞ゆる時には、彼の耶蘇基督の耳に「磔に懸けよ、磔に懸けよ、殺せよ、亡せよ」と響いた恐ろしき叫の聲を想起するのである。

時計が時を打ては、耶蘇基督が橄欖の園に於て

其の御苦難御死去の時刻が近いて、悲しみと恐れとの爲めに、起つた心臓の皷動を想出し、或は鐵槌で十字架の木に釘を打つ荒き音を追想しても宜い。

何か悲しい事、苦しい事、若くは困難に逢ふ事がある度毎に、此等は我が救主の體と心とを刺貫いて苦しめた所の云ふに云はれぬ苦痛に比ぶれば何でもない事であると考へねばならぬ。

第廿三章　五官を善く使ふ機會を利用する方法

既に前章に於て、我等の知識を、感覺的事物より引離して、之れを神の事、及び基督生涯の事の觀想に、引上る道を述べたのである。今や茲には此等の事物より、觀念の種々の題を摘用する他の方法を示さう、夫れは人の好が、各異なるによつて、其の種々の好に應じて、心に修養の材料を、

得しむる爲めである。啻に質朴な人々ばかりでなく、高尚な人、又た靈生の道に最も進んだ人にも、之れを利用する事が出來るのであらう。何故ならば、此等の人々が、如何に完全であつても、高尚な觀想に對しては、必ずしも均しく傾向、等しく準備して居るとは云はれぬからである。

素より此等の修業の多き爲め、混雜を來すと恐れるに及ばぬ。何時も適度に止り、賢明な意見に

從ひさへすれば、混雜は逃れる、努め忘れるな、啻に此の場合のみならず、如何なる場合に於て卑見を述ぶるも、此の適度に止る事と、賢明な意見に從ふ事とを、忠實に守るべきは素より云ふまでもなき事である。

我等が周圍の事物の美に感じた時には、世人が非常に尊重するものと雖も、之れを天の寶に比すれば泥の如く、實に輕ずべきものであると思ふが

宜い。永遠の寶こそ我等が心を盡して、熱望すべきものであつて、世上を輕ずるのは當然である。

大陽を眺むる時には、我等の靈魂が若し造物主の聖寵を有するならば、之れよりも尙ほ一層美しく、尙ほ一層輝くと思へ。併しながら若しも其の聖寵なくば、地獄の暗黑よりも、尙ほ一層暗くして恐ろしいのである。

我等が廣大壯麗なる、高き大空に眼を上げる時

には、心の眼を以て、尙ほ一層高く望み、聖人の居所までに及ぼして、此所に思を注ぎ、若し我等が此の世に於て、聖寵の純潔を保つならば、此所が我等の永久幸福の住處として、備へられた所であると、心に思込め。

好き調子の音樂や、鳥の囀るのを聞く時は、天上の樂土に於て、永遠のアレルヤで響き渡る歡ばしき歌に心を引上げ、神に向つて、何卒我等も永

遠に神の讃美歌を、天に在る諸靈と共に、謠ふ事の出來るやうに願へ。

若し我等が所造物の美しさ、優しさに見とれて居ると、氣が附いたならば、心の中で此の美しく優しき、容の中に、地獄の蛇の潜む事を考へ、彼れは茲にありて我等を覘ひ、我等を殺すまでには至らずとも、少なくも打たん爲めに、待搆へて居ると思ひつゝ、之れに向つて斯く云はん「嗚呼、咀

呪はれたる蛇よ、何等の狡猾を以て、我れを亡さんと待搆へるや」と、而して天主に向ひ斯く云はん「主よ、主は我れに敵を發覺せしめ、我れを其の狂怒より救出したまひしを、永遠に感謝し奉る」と。

此の故に我等は、此等の狡猾なる誘導を避け、十字架に懸りたまへる耶蘇の、御疵の前に平伏し一心に之れを思ふて、救主が我等を罪より救出し

五官の快樂を嫌はせる爲めに、其の御肉身に之れを受けて、忍びたまひし事どもを、觀想せねばならぬ。

他に又た所造物の、欺詐を避けしむる爲めに、示したき方法がある、夫れは目下我等の眼に、斯く愛らしく、樂しく見ゆる此の體は、死んで如何なるかと云ふ事を、心に深く觀想する事である。

我等が歩きつゝある間に、一歩一歩づゝ、死に

近くのである事を考へよ。

鳥の空に飛ぶのを見たり、水の川に流れるのを見れば、我等の命は、夫れより早く、其の終局に向つて、過行くのであると、思はねばならぬ。

烈風、電光、雷鳴等は、我等に、公審判の恐ろしき日を、思はせやうから、其の時には跪いて神を拜禮し、聖寵を賜はると共に、威稜の尊前に出頭する爲めの準備に、必要なる猶豫を、切に願は

ねばならぬ。

種々様々な辛苦艱難に遇ふ時は、斯う爲るが宜い、假令ば、悲しみとか憂ひとか、非常に惱まされる時、若くは暑さ寒さに冒されるとか、又た他に何か不自由不都合のある時には、直ぐ心を天主に引上げて、此の試を我等の大なる益になるやうに、時と程とを見計ふて與へて下さつた神の永遠の思召を拜するのである。而して神が我等に示し

たまふ愛、及び聖意に適ふ方法によつて、之れに事へ奉る機會を、與へられるを喜びつゝ、心の中に斯う云はねばならぬ「主よ、主は初め無きよりして、我が今日此の苦に遇ふ事を、父たる愛を以て計ひたまひし故、今や我が身に於て、主の思召は成就す、嗚呼甘味なる主、永遠に稱讃せられたまへかし」と。

若し我等に何か善き考が起るならば、直ぐ我等

の精神を神に向け、其の善き思は、神より來れり
と心得て、感謝せねばならぬ。
聖書等を讀む時は、書中の言の下に神を認め、
其の言は神の口より出でた如くに、之れを受ける
が宜い。
聖き十字架を見る時は、夫れが我等の軍旗であ
と心得、若し之れに遠ざかるならば、我等は殘酷
な敵の手に陷ち、却て軍旗の下に進むならば、屹

度光榮なる分捕品を擔ふて、天に到達するに、決
つてあると思へ。
童貞瑪理亞の温雅なる肖像を見る時は、我等の
心を、瑪理亞の居られる天國に引上げ、其の神の
聖意を全うする事を始終心掛けられたのを慶賀し
世の救主を產み、之れに乳を飲まして、養育なさ
つた事を稱讃し、我等の開いて居る心戰に、思惠
と保護とを與へて下さるのを、感謝せねばならぬ

聖人の肖像は、我等に勇ましき戰士であつたものを示すのである。聖人達は先づ自ら勇ましく、戰場を奔走して、我等に道を開いて下さつたのである。若し我等も聖人方の樣に、永遠光榮の冠を戴かうと思へば、同く戰場に於て、戰はねばならぬ。

聖堂を見る時は、他の思想も起るであらうが、特に我等の靈魂は、神の聖室であるから、神の聖

意に適ふ樣に、清く奇麗にして、之れを保たねばならぬと考へよ。

御告を報ずる三打の鐘を聞く時は、天使祝詞の前に唱ふる言に從ひ、左の三箇の事を觀念するのが有益である、即ち一打目に於て、神が天使を地上に遣したまひ、夫れが我等の救靈の本になつた事を感謝し、二打目に於て、瑪理亞が極て深き謙遜を以て、聖母の高崇な地位に上げられなさつた

事を、瑪理亞と共に歡び、三打目に於て、至福なる母とガブリエル大天使と俱に心を合して、產れたまふた神たる嬰兒を拜禮するのである。尊敬を表する爲めに、二打は少しく辭儀し、三打目には之れを一しほ深くするが宜い。御告の鐘の三打によつて、分けられた此の觀念は、如何なる時にも用ひられるが、尙ほ晩と朝と晝とに用ひられるのがある。夫れは救主の御苦難に就て、聖母の受け

られた悲の事で、我等が之れを思ふのは當然であつて、若し之れを思はぬならば、餘りに恩を忘れた譯である。

故に晩は聖母が、尊き聖子の血の汗を橄欖の園に濺ぎ、且つ其所にて捕はれ、此の恐敷通夜、幾多の虐待を蒙りたまひし時、母の心を以て、如何に悲みなさつたかを考へよ。

朝は耶蘇がピラト及びヘロデの裁判所へ引かれ

死刑の宣告を受けて、十字架を擔はせられたまふた時、聖母は如何に苦痛を忍びなさつたかを考へて之れと共に、苦痛を同じうするのである。

晝は神の子が、十字架に釘けられ、殺され、又た其の脅き脇腹を、豪ひ槍で突かれたまふた時、神の母の悲き心は、如何ばかり苦の刃で貫かれたかを考へるのである。

此の聖母の苦痛に就ての觀念は、木曜日の晩から土曜日の晝まで爲て宜い、外の觀念は次の日の爲めに用ひられる。併し此の事は、各自格別の信心は任し、又た外部の場合が、自然に種々の觀念の題目を、呈する事があるであらう。

要するに、我等の五官を治むべき方法を、簡單に約して云へば、畢竟如何なる場合にも、所造物から自然に起り來る愛憎の情に、決して支配せられぬやうに、注意すべく、且つ專ら神の聖意に歸

依し、之れに引かれ、又た指導せられるやうにして、神の聖意によつて愛き、或は憎ふべきものゝ外、決して愛いたり憎ふたり、爲ぬやうにすべきものである。

既に五官を治むる種々の方法を示したが、之れを平生觀念させる爲めではない、神の何よりも望みたまふ事は、我等が敵と邪慾とに打勝つ爲め、度々心を籠る事と、又た反對なる德の業を以て、

之れに抵抗する事とである、故に出來る丈け、神の尊前に心を慎まねばならぬ。五官を導く方法を說いたのは、必要の場合に之れを用ひさせる爲めである。

結局心得て置かねばならぬのは、外部の業は幾干良好であつても、同時に澤山なものに從事するのは、益が少ないばかりか、尙ほ度々精神を亂し自愛心を温め、不辛抱を增し、殆ど惡魔の眞實の

囮と成る事がある。

第廿四章　舌を箴むる法

我等は舌を好く治めて、之れを箴る必要がある何故ならば、我等は舌を恣にして、五官を樂ましむる事柄を出放題に語る自然の傾向があるから此の贅言に流れ易い理由は、就中我等の傲慢にあるので、我等は動もすれば物識のやうに思ひ、自分の思想に滿足して、勢ひ贅言を吐散し、人に

も我が思ふ事を、傳へやうと力むるのである。人の先生氣取になつて、恰も人が我等の教訓を受けねばならぬものゝやうに爲するのである。

斯く物を云ひ度かる心より生ずる不都合を、悉く簡單に述べるのは易しい事でない。

多言は怠惰の母、愚暗と輕佻との徵、謗の門、虚言の機械、敬虔と熱心とを冷却ならしむるものである。

饒舌は邪慾に勢を附け、邪慾も亦た饒舌を煽て自由自在に、我儘勝手な事を云はしむるのである

何卒我等の話を、甘じて聽かぬものと、無暗に論ずるな、其の者の倦怠を來すであらう。我等の語を能く注意して聞くものとでも矢張謹慎の規則に背かぬやう、適度に止まらねばならぬ。

聲高々と、横柄に談話するな、斯な調子は非常に氣に觸り、又た自負と虚榮心との徵である。

自分の事、自分の行爲、或は自分の親の事などを、話してはならぬ。話すならば、止むを得ざる必要の時だけ、而かも成るべく簡單に、謹慎を以て話さねばならぬ。

若し人が自己の事を、餘計に話すと見ゆれば、縱ひ其の人が自ら卑下し、自己を咎むるやうな事を云ふとも、決して之れを眞似してはならぬ。却て之れを鑑みて、自ら警むるが宜い、

成る丈け他人の事、及び他人に關する事を、話さぬやうにせよ、然し機會があつて、其の善を擧げて、語るのは別である。

神に就て、殊に其の愛憐、其の善良を話す事を樂みにするが宜い、併しながら、之れに就ても、餘り自分を信任してはならぬ、寧ろ人の語る事に注意し、其の聞いた所の善言を心に保つて居るがよい。他の談話ならば、其の言の響を耳までに到

らしめ、心は神に始終一致冥合するやうにして置かねばならぬ。若し又た夫れを會得して、夫れに答ふる爲め、注意せねばならぬならば、夫れでも神の在す天へ心を上げ、神が賤き我等を、天より顧みたまふ事を、感謝せねばならぬ。

若し何か一の考が心に浮んだならば、夫れを口に出す前に、先つ熟考せねばならぬ、何故ならば默して居つた方が、宜かつたと云ふ事を、認め

ることが度々あるのみならず、一且我等が語つて宜いと思ふた事柄でも、後から考へて見れば、却て云はぬ方が宜かつたと自ら能く合點する事がある。

默する事は心戰に於て大なる力と成り、之れは勝利の確證である。

己れに賴まずして、神に信賴する人は、默する事を愛す、沈默は祈禱を助け、德の修業を爲す者

を大に防禦するものである。

沈默の習慣を附けるには、度々多言の凶き結果と、危險と、又た之れに反對なる德の、大なる益とを考へよ、此の德を愛慕せよ、縱ひ話して惡くない時でも、若し夫れが自分と他人との爲めに、害にならぬ限りは、暫の間默せよ。

人々の談話を避けても宜い、夫れが爲めに何の損失もあるまい、何故なれば、其の時は天使、聖

人、神と交つて居るのであるから。

終に耐へねばならぬ心戰を考へ、夫れに負けぬやうに務むべき凡ての事柄を考ふれば、冗話に費すやうな餘暇は、餘り無い事を認むるであらう。

第廿五章　敵と戰ふて勝つが爲めに基督の兵士たるもの出來る丈け心の擾亂と憂慮とを避くべき事

若し我等が心の平和を失ふた時には、力の及ぶ

丈け、之れを取返す爲めに、働かねばならぬ。と は云ふものゝ實は世に我等より心の平和を奪ふて道理上我等を擾亂の中に陷れる筈の場合は、一つもないと知らねばならぬ。

成程我等は罪に就て、悲しまねはならぬ、併しながら既に數回説明した通り、其の悲みは穩かな悲みでなければならぬ、又た他人の罪に就ても、仁愛の心から同情を起さねばならぬ。が我等は心

の中に歎くと雖も、夫れが爲めに、精神を擾亂さぬやうに爲ねばならぬ。

且つ又た是れよりも重く、是れよりも辛き出來事、假令ば病氣、癈疾、死亡、或は疫病、戰爭、火災、及び其の他の災難が、吾等若くは我等に關係あるものゝ上に、落ち來る時は、此等の災禍は甚だ我等の性に反するものであるから我等は出來る丈け、力を盡して之れを防ぎ、避けやうと爲るのである。併しながら神の聖寵の祐を以て、啻に之れを好するのみならず、貴重の物として、尊び愛する事も出來る、夫れは罪人に取りては、之れを至當の罰と思ひ、善人に取りては、德を行ふ機會のやうに思ふからである。神が之れを嘉したまふのも、此の見地からに外ならぬ。我等が其の尊き思召を以て、心を落着けた時には、苦い事も厭な事も、平氣で經過る事が出來るのである。

加之憂慮は總て神の聖意に適はぬに相違ない。何故ならば其の理由が何であつても、心慮は何時も何か不完全を帶びて居つて、何かの惡しき自愛心の根元より出て來るからである。

故に總て我等の心に何か擾亂や憂慮を來たすべき事を警戒する番兵を置かねばならぬ。而して其の番兵が警戒を報じたならば、直に武器を採て防ぐべきである、我等の前に現れ來る災禍が、如何

なる狀姿であつても、之れは決して眞正の災禍でないと考へねばならぬ。蓋し彼等は眞正の寶を、我等より奪ふことの出來るものではない、神が之れを命じ、若くは許したまふのは、既に述べた所の正當なる目的、又は之れに類する目的の爲めである。其の目的は如何なるものであつても、夫れが正義と聖德とに基いて居ると云ふ事は、我等の疑ふ能はざる所である。

如何なる困難の中にあつても、精神が虚心平氣を保つ間は、餘保有益な事がある、併し之れに反して、虚心平氣でなければ、總て我等の骨折は、皆な無益になつて了ふ。

加之我等の心が擾亂されてある時には、何時も敵の樣々の打擊に遭ふのである、尙ほ又た斯る不安の狀態であつては、確に德に導く所の正き道を認る事が、最早出來ぬやうになつて了ふのである

靈魂の敵には、神の精神が大事を行はん爲めに住み給ふ所の此の安心ほど憎ましきものはない、夫れで度々人を欺く姿の下に、善らしく見ゆる種々の望を起さして、此の安心を亂さうと力むるのである。然し此の望は迷であるとの徵が、種々ある中に、此等の望は平和を失はすと云ふ事が、一番確乎な徵である。

斯る大危險を避けるには、番兵が何か新き望の

起りかゝるを知らせるや否や、早く之れに心の入口を開いてはならぬ。先づ我意を全く去り、望を神の前に置き、謙つて我等の盲昧愚暗なることを自白して神に祈り、其の光明に照して、此の望は神より來れるか、將た惡魔より來れるかを、自ら示したまはん事を、切に願はねばならぬ、而して出來る時は、指導師の異見を伺ふが宜い。

假に此の望は宜い、神より來たものであると認

めたとすれば、其の望の働きによつて行はんとする前に、先づ其の望の度に過ぎた激しさを押へるが宜い。然うすれば之れは行に先つ一の克己となつて、其の事業は自然の激しき活動によつて行ふよりも、尙ほ深く神の聖意に適ふやうになつて、時としては又た此の克己が、事業其物よりも、神の聖意に入る事があるであらう。

斯の如く善からぬ望を押へ、唯だ善き望を、一

旦自然の發動を押へて後にのみ實行すれば、心の底に安和と平穩とを保つに至る。

之れが爲めに尙ほ心の中に起る咎と、刺激とを用心せねばならぬ。何故なれば、之れは自己を咎めるのであるから何時でも神より來るらしく思はれる。併しながら數度惡魔が之れを起させる事がある。其の咎の結果によつて、何れより來れるかを知る筈である。

若し此等の心の咎が、我等をして尙ほ一層謙遜ならしめ、尙ほ一層善業を爲すに活潑ならしめ、尙ほ又た我等より神に賴む心を奪はぬならば、之れを神より來れるものと做して、之れが爲めに、神に感謝すべきものである。然れど若し其の咎が我等の心を亂し、我等を小膽ならしめ、心細ならしめ、善を行ふに怠惰ならしむれば、疑念なく之れは惡魔より來るのである。そんなら之れに片耳

をも貸さずして、我が道を辿つて行かねばならぬ

既に述べた事の外に、最う一つ記憶べき事は、即ち凡そ心に憂慮の起るのは、往々何歟の反對に遭ふからである。然るに其の反對の刺擊に對するには、二個の心得がある。

第一、此の反對は誰に反するのかと考へて見よ神より來れる精神に反するのか、將た自愛心、若くは我意に反するのか。

若し自愛心及び我意に反するのならば、之れが恰ど我等の二の重なる敵であるから、之れに抵抗するものを反對者と云ふ勿、寧ろ之れを神より出たる恩惠、且つ祐助として喜んで受け、感謝せねばならぬ。

若し又た此の反對が、神より來れる精神に抵觸して居るならば、夫れでも決して安心を失ふてはならぬ、次の章に於て其の事を示す積りである。

第二、反對の時に際し、我等の精神を神に引上げ、總て神より來れるものは、其の理由を尋ねずして、目を閉ぢて之れを受ける筈である。是れは神の攝理の仁愛の深き聖手が、此の反對の試を、我等に下したまふのであるから、之れを恩惠と思ふて、受けねばならぬのである。其の價値は今曉らずとも、後で分るに相違ない。

第廿六章　罪によりて負傷せる時に爲すべき事

我等が弱き爲め、或は惡き心より、故らに何か罪に陷る不幸に遭ひ、之れが爲めに我等の靈魂が負傷して居つても、決して恐怖や憂慮に流れてはならぬ。寧ろ精神を神に引上げて、斯う云ふが宜い「嗚呼我が神よ、是れこそ我が力によつて出來たる事なれ、我が淺ましき性には、失墜の外に待つべきものなかりき」と。而して軈て自らの目にも

卑下して、罪によつて神に反いた悲しさを言顯し心を亂さずして我等の惡き傾向就中我等を罪に導いた傾向を激く責め、其の後に斯う云はねばならぬ「嗚呼、若し主が御慈悲を以て、我れを止めたまはざりせば、我が失墮は、是れのみにて罷まざりしならん」と。

其の時に深く神に感謝して、以前より尚ほ一層神を愛せねばならぬ。然うすれば神の寛仁の程は

我等の驚くばかりであらう。神は我等が斯くまで背いたにも拘はらず、尚ほ聖手を延べて、我等が尚々墮落せぬやうにして下さるのである。

夫れから又た神の限なき御愛憐を、深く賴んで斯う申上げねばならぬ「主よ、神たる御慈悲を垂れ、我れを赦し、我れを主に離れしめたまはず、主に遠りて再び背く事なからしめたまへ」と。

斯うしてからは、最早我等を神が赦したまふた

か否やに就て、無暗に案じてはならぬ。之れを頻りに案ずれは、善さゝうに見ゆる種々の口實の下にでも、傲慢や、不安や、時を費す事や、惡魔の迷想などが籠つて居る、故に我等の主耶蘇基督の愛憐の深き聖手に、我等の一身を目を閉ぢて任し始より恰ど失墜のなかつた如くにして、歩み繼けて行かねばならぬ。

假令一日に數度の失墜を爲て、其の度毎に負傷

するやうな不幸があつても、何時も既に云ふた通りにして二度三度、幾度失墜があつても、一度の後と少しも變らず、始終同一の賴を有つて居らねばならぬ。我等自身に就ては、益す輕蔑の念を深め、罪に對しては、愈よ激く憎み嫌ふ心を起し、尙ほ將來一層用心する爲めに、力を盡さねばならぬ。

此の仕方は、極めて神の聖意に適ふものである

から、惡魔は非常に之れを嫌ふのである。又た此の仕方では、初め、自己の敗かしたものに、今度は負けるから、大に恥て欺騙の有る丈けを盡して我等に此の仕方を止めさせるやうに爲するのである、而して不幸にも度々我等の怠慢及び不用心によつて、實際に止める事がある。

今示した仕方に困難を感ずれば感ずるほど、愈よ己が身を強いて之れを務め、又た幾度も之れを

繰返さねばならぬ。假令失墜を爲たのは、一度ばかりであつても。

若し又た罪を犯してから憂慮で、恥て落膽して居るならば、先づ徐々と亂れてある精神に平和、安堵、信頼等を回復し、而して一たび此等の武器を裝ふた上、神に立歸らねばならぬ。罪を犯した後に憂慮を感ずるのは、神に背いたのよりも、寧ろ自ら己れの害になつてあるからである。

此の平和を回復する道は、先づ最早自分の失墮を考へず、得も云はれぬ程の神の仁愛を考へ、我等の罪が如何なるものであつても、又た如何に重く見えても、神は一刻も早く、之れを赦したしとの思召である事を考へるのである。看よ神は種々の方法、又た様々な道を以て、罪人を呼び招きたまふ事を、罪人が自己に復歸して、此の世に於ては之れを聖とならしむる聖寵を以て、後の世に於

ては之れを永遠に幸福ならしむる光榮を以て、自己に一致するを促したまふ事を。

此等の考へ、若くは之れに類する考を以て、我等の心に平和を回復した上、其の時に初て既に述べた所に從て、我等の失墮を考る筈である。

其の後に我等が告白せんとする時（是は度々する事を勸める）我等の一切の罪を想出し、再び神に背いた悔と、殘念とを惹起し、改める決心を固

め罪を殘らず正直に告白せねばならぬ。

第廿七章　德に身を委ねんとするもの、及び罪の奴隷たるものを攻撃し之れを欺く爲めに惡魔の守る順序

惡魔は我等を亡さんとのみ務むる事を知らねばならぬが、併し惡魔は我等と戰ふ時に、何時も同じ武器を用ふるものでない。

惡魔が人を種々攻撃するに守る順序、及び欺く

方法を述ぶるに先つて、靈生に於る人の種々の狀態を知らねばならぬ●

或る者は罪の奴隷でありながら、此所を脫出する事さへも思はぬのである。

或る者は奴隷を逃れるのを望むは望めど、斷然これに仕かゝる決心が出來ぬのである。

或る者は自分は德の道を歩んで居ると思へども實は益す其の道を遠かりつゝあるのである。

終に或る者は、一旦は德を得るに達した上、尙ほ一層重大な敗德に陷るのである。

此等種々の狀態に就き、順次に之れを述べやう

第廿八章　惡魔が既に罪の奴隷となつたものと戰ひ、永く其の奴隷たらしむる爲めに用ふる策略

一旦惡魔が人を罪の奴隷たらしめた以上專ら務むる所は、益す其の目を暗まして、己が憫然な狀

態を認むるに至らしむべき思を避げざす事である

惡魔は唯だ其の人の思想を改めて、感化するに導くべき考や勸を避けしむるのみならず、其の人を復た同じ罪、或は尙ほ一層重大な罪に陷れるやうに、危險な機會を備へるのである。其の時は其の人の明盲目が愈よ激くなつて、極點に達するやうに成る。其所で此の憫然な人は、終に罪の奮憤の深淵へ洗入て了ひ、最初の明盲沙汰が益す不善

な盲目を來し、之れが又た尙ほ一層重大な罪を惹起すのである。斯の如くにして、罪人は其の憫然な生を解脫すべからざる迷路に踏入るから、神が特別に仁愛の深き恩寵の結果を以て、之れを引止めて下さらねば、遂に死ぬまで然うである。

斯る狀態になつては、此所を脫出る道が、此の不幸なる罪人に取りては唯だ一ある。即ち之れを暗黑の中に感ぜしめて、光明に呼返す考や勸に應

ずるに限るのである。其の時は心を神に引上げ、心の底より斯く神に叫ばねばならぬ「嗚呼、我主よ、希くば速に來りて我れを助けたまへ、我れを」して永く此の罪の暗黑の中に在しめたまふ勿れ」と、罪人は斯の如く祈り、若くは之れに類する祈りを絕えず反覆し、其の憫然な境遇より間斷なく神に叫ぶべきものである。

若し出來るならば、早く聽罪師の許へ行き、其

の援助と意見とを仰ぎ、其の指圖と導引とによつて敵を防ぎ得るやうに爲ねばならぬ。若し又た聽罪師の許へ行く事が出來ぬならば、十字架に釘けられたる耶蘇の肖像に向ひ、其の足下に平伏して援助を求めねばならぬ。童貞瑪理亞の肖像の前でも、同じやうにして、祐助と愛憐とを願ふが宜い

我等が罪の上に勝利を得るのは、斯の如く行ふの速なるによると云ふ事を心得ねばならぬ。次の

章に於て之れを說明さう。

第廿九章　罪の奴隸たるのも己が狀態を知て脫れんと欲する時に惡魔の用ゆる策略と迷誤と又た其の人の善良なる決心の無功と爲る理由

己が心の惡き狀態を知り、其所より脫れやうと思ふものは、常に惡魔より左の如くに、欺かれて負けるのである。

即ち其の者は斯う自分に云ふて居る「後で後で明日の事に爲やう、先づ何々を爲ねばならぬ。先づ何々の憂慮を逃れねばならぬ、其の後に尙ほ一層安堵を得て、靈生に身を委ねやう」と。

是れ實に多數の人々が捕はれた囮である。是れが始終に人を欺くのである。其の理由は總て我等が救靈と、神の光榮とに從事せんとする度毎に、怠慢と惰懶とに支配せられるからである。寧ろ却

て尙ほ一層神速に勇氣を以て、斷然其所を思切らねばならぬ。何故に後で後でと云ひ、明日に爲やうと曰ふか、否な今の事、今日の事である。縱や後でと云ひ、明日に爲やうと云ふ時を與へられても、前に先づ我が身に負傷を受けさして、再び敗德を重ねると云ふ心は、救靈と勝利とに達する捷徑であるか。

茲を以て直に分る、此の迷と前の章に述べた迷

とを避けるには、速に神より來れる考や、勸に從ふ事が、最も良き道である。速にと云へば、決心と云ふ意味ではない。此の決心は度々人を欺くものである。又た種々の理由で、此の無駄な決心に迷はされて、止まつたものが多くある。

其の第一の理由は、既に示した如く、我等の善き決心は、己れに頼まずして、神に頼むと云ふ基礎に原かぬからである。夫れで我等の迷と明盲

目の原なる傲慢を認むるに妨となる。

我等の誤謬を認むべき光明を與ふるものは神である。之れを矯正す方法も亦た神の仁愛から出るのである。神が我等の失墮するのを措きたまふ譯は、我等が失墮した時、己れを恃むより神を頼むに、又た傲慢より能く己れを知るに移らしむる爲めである。

此の故に我等の決心に、實際功能の有る事を望

むならば、先づ之れを堅固ならしめねばならぬ。之れを堅固ならしむるには、己れを恃む氣は毫もなく、單だ神を頼むの上に、謙遜を以て原かしめねばならぬ。

第二、我等をして漠然たる決心に止まらしむる理由は、我等が斯る良き決心を爲す時、主に德の美と價とに引かされるからである。是れ即ち我等の意志を軟弱なるまゝ引付けるのである。夫れで

德に達するためには、之れに打勝たねばならぬ困難が起れば此の憫然な意志は、全く軟弱及び無經驗の儘であつて、之れに耐えず、過て自ら倒れて了ふのである。

故に德其物よりは、寧ろ之れを得る爲めに忍ぶべき困難を愛し貴ぶやうに修業せねばならぬ。此の困難に時に應じて多少馴るやうに習慣を付けねばならぬ。若し道德に達せんと眞面目に望むなら

ば、其の道は之れ一に限るのである。

尙ほ一の知るべき事は、我等が己れと敵とに打勝たうとする熱心と速迅との程度に應じて、困難を愛する量と、之れに遭はうとの望が增加すると云ふ事である。

我等の決心の無功に成る第三の理由は、其の指す所の直接の目的が、德及び神の聖意と云ふよりは、寧ろ自己一身の利益なるが爲めである。此の

事の出來するのは、特に我等が精神上の快樂を覺べ、若くは困難に惱みつゝある時である。蓋し此の困難の中には、自己を全く神と德行とに委ねんとする志の外、他に慰籍は得られぬ理由である。

斯る不都合を來さぬやうにするには、精神上の愉快を覺ゆる時には、別して決心するに謙遜と謹愼とを有たねばならぬ。約束及び誓願を爲すに就て別して然うである。又た困難に遭ふ時の決心は

專ら神の聖意に從ふて、十字架を擔ふべき耐忍と天命に安んずる事とを、目的と爲ねばならぬ、須く十字架を擔はんと欲する志の勇ましさは、人間の慰籍を悉く捨て、若し要あらば、天の慰籍をも棄てゝ顧みずと云ふほどの覺悟が有るやうでなければならぬ。我等は求むべき恩寵一つ、欲すべき恩惠一つ、即ち堪忍を破らず、天主の威稜に反かず、萬苦を凌ぐ爲めの神の祐である。

第卅章　完德の道に歩めりと徒らに想像する人の迷想

我等の救靈の敵は、二度ほど襲ひ來て失敗しても、復た三度目の戰を開く、此の時は現在我等に何か害を加へて、戰ふて居る敵を忘れさすやうに力め、我等をして完德の高きに達せしめんとて、其の望と決心とを以て心を紛かすやうにするのである。

夫れであるから、我等は始終負傷しつゝあるも其の負傷に頓と氣を附けずに居る事がある。專ら決心の事のみ考へて、之れを最早實際の事の樣に思ひ、傲慢の種々の念に心を奪はれるのである。

些細な事や、僅少な反對の言をも、忍ばうとは爲ずして、彼の大困難なる煉獄の苦をも、神を愛する爲めには忍ばうと云ふ決心を立直すに、長き時間を費して居るのである。

斯る困難は實際我等に遠いから、我等の感覺性は之れを否とも思はず、夫れで我等は明盲目で、彼の大困難を凌いで居るものゝ堪忍の程度に、眞實到達したものと想像するのである。

故に若し此の迷想に陷らぬやうにしやうと思へば、我等の近くに在つて、眞面目に我等と戰ふて居る敵に向つて戰はねばならぬ。其の時こそ我等の決心が、眞であるか偽であるか、强いか弱いか、

明瞭に見分る事が出來て、確に基督の眞直の道から、完全の德に進むやうになる。

然し我等を攻擊し馴れて居らぬ敵に就て云ふ時は、之れに向つて攻勢を取る事を勸めはせぬ。唯だ其の敵が愈よ本統に、我等に蒐つて來るであらうと、豫め知る事の出來た時にのみ、之れに向つて攻勢を取れば宜い。何故なれば其の時に決心の用意して愈よ戰ふべき日には、强く且つ充分準備

が整ふてあるやうにするのは宜しいからである。

兎角我等の決心を、實際のものと思ふてはならぬ。暫くから德に熟練して居つたとても、始終謙遜にして、我れと我が弱き質を、危んで居らねばならぬ。唯だ神のみを賴にして、度々祈禱を以て依賴し、神が我等を强めて、總ての危險、就中自負と己れを恃むに對して、防禦して下さるやうに願はねばならぬ。

何かの小さき過失は何時もある。神は之をれ以て我等を己れを知つて謙遜ならしめたまふのである。之れが又た或る德を有つ資とも成る。縱や凡ての過失を悉く避ける事は出來ずとも、我等は完德の尙と高き點にまで上がる決心する事は、許されて居るのである。

第卅一章　惡魔が我等に德の道を離れさす爲めに用ふる奸策

惡魔が我等の德の道に進んで居ると見て取た時我等に向つて用ふる所の第四の奸策は、我等に何か好き望を起さして、夫れが爲めに德行を打棄さし、我等を惡德に投落さうとする事である。

假令ば茲に一人の病者があつて、非常の堪忍を以て、病苦を忍んで居ると爲るに、狡猾な敵は此の人が堪忍の德性を求めやうとしつゝあるを知り直に、若し健康であるならば、何樣な善事が行は

れるであらうかと云ふ事柄を目前に置くのである

又た其の時は神に事ふる爲めに一層合格して、自ら尙ほ手柄を爲し、他人にも一層有益になるであらうと思はせるやうに爲るのである。

此の如き迷想を以て、其の人を動かして後、惡魔は漸次と其の迷想を强くならしめ、病者が其の志す所を、實行する事の出來ぬのを、心配するまでに至らしめるのである。

迷想が强くなるに從つて、心配が殖て來る、乃で惡魔は極く徐々と病者を心配の境遇から、病氣を忍び切れぬと云ふ狀態に移らしむるのである。

病者は實際病氣が忍び切れぬのではない、病氣は公益の爲め慈善業杯を行はんとする望を防るから、之れが忍び切れぬのであると思ふのである。

其の人を斯まで迷に導いて後、矢張惡魔は例の巧猾な策略を以て、其の人の念頭に、神に奉事し

善業を行はんとて志した目的を忘れさして、唯々病氣を逃れ度と云ふ望ばかりを遺すやうに爲るのである。

病氣が思ふ樣に癒らねば、病者は全く忍び切れぬと云ふ程に心を亂し、而して思はす知らず其の行ふて居つた德に、反對の欠點に陷るやうに成るのである。

乃で此の奸策を防ぎ、之れに抵抗する道は、斯

うである、即ち我等が病苦に惱まされる時には、注意して其の時に實行が出來ず、却て我等を心配させるやうな善業の空漠たる望は、一つも心に容れぬやうに爲ねばならぬ。

此の時は謙遜と天命に安ずる堪忍とを以て、我等の望は思ふ樣な結果を生ずる事が出來ぬかも知れぬ、我等の思ふ程に、長く此の志を續ける事は、覺束ないと思ふべきである。

又た神は其の神秘の思召に於て、我等が行ひ度と思ふ彼の善を我等に望みたまはぬと思はねばならぬ。神が我等に望みたまふのは、唯だ我等が謙て、其の思召の温和にして、抵抗すべからざる聖手の下に、歸服する事の外にはない。

或は又た若し我等の指導者、若くは何かの煩しき事柄が、信心の勤務、就中聖体拜領杯を、思ふ通り行ふ事を妨るならば、之れが爲めに心配した

り、心を亂したりしてはならぬ。却て我意を打捨て、唯だ神の聖意のみ仰いで、自ら斯う云はねばならぬ。

「若し神の攝理の眼が、我が心の中の幾多の忘恩過失を認めたまはずば、我れは聖体拜領を、差止めらるゝに至らざらん、然るに今や神は此の方法を以て、我れに我が身の不肖なるを、知らしめんとしたまふ故、代々讃美せられ祝せられ給へかし、

我れは主の限なき仁愛に深く賴み奉る。我れは主が我をして萬事天命に甘んじ、主の聖意に應ずるに慣はさんとしたまふを信じ、主が斯く我が心を開き、我が心をして主の要求したまふ所を悉く甘んじ受けしめんとしたまふは、主が精神的に我が心に入り、之れを慰め、之れを主より離れしめんと力むる敵に對して强めんとの思召なれば、主の眼前に嘉としたまふ所は、皆な斯く遂げ行はれ

度し。嗚呼、主は我が造主、我が救主なり、願くは主の聖意が、今も何時も我が糧と成り、我が祐とならん事を、嗚呼、我が愛し奉る主よ、我が主に願ふ所の唯一の恩寵は、我が心の總て主の聖意に適はざる所のものを除去り、何時も德の飾を粧ひ、主を絶えず拜受するの準備ありて、主の之れに要求せんと欲したまふ所は、何事をも行ふ覺悟あること即ち之れなり」と。

我等が實行する事あたはずして、唯だ心の中に起して居る望の本原が何であらうとも、之れを惹起したものが、天性であるとしても、惡魔であるとしても、我等を亂して、德の道より離れしめやうとしても、若し又た神が自ら我等に之れを下して、其の思召に服するや否やを、試したまふのであるとしても、兎も角も今述べた志で居るならば、屹と其の望の中に專ら聖意に適ふ方法を以て

之れに應ずる機會を認むるに相違ない。眞正の信心、及び神が我等に要求したまふ所の奉事は之れに極るのである。

又た我等が苦痛に罹つた時には、其の苦痛が何所から來たのであつても、一の注目すべき事がある。即ち之れを和ぐるには、聖人でも用ひられた普通の方法を用ふるも無論よろしいが、併しながら之れを用ふるのに、其の望及び志す所は、專

ら苦痛を逃れやうと云ふ事でなく、寧ろ神の思召である、神は此の方法を以て我等を癒さんとの望みであるかも知れぬと云ふ事でなければならぬ。

若し我等が斯る志を保つ事を忽にするならば遠からず悲き結果を覺えるであらう。事が我等の望み通り、好み通りに行かぬならば、容易く短氣を起すであらう。少くも我等の堪忍は不完全であつて、餘り神の聖意にも合はず、神の聖前に於て

功德も少きものに成るであらう。

終に自愛心の窃な迷に罹らぬやうに警戒したいのである。此の自愛心と云ふものは、或る場合を利用して、我等の缺點を隱し、或は之れを當然の事に思はせやうと爲るのである。

假令ば茲に病人があつて、其の苦痛を餘り堪忍せぬとすれば、其の病人は自分の堪忍せぬのを、善に對する熱誠の覆の下に隱さうとして、或は斯

な事を云ふであらう「我が憂ふる所は、病氣の苦痛より出づる不堪忍ではない、寧ろ此の機會を與へたのは道理なる殘念である」と、或は又た斯う云ふであらう「我れに取りて最も苦しいのは、就中箇程に世話して呉れる人々に心配を掛け、氣の毒を掛ける事である」と。

又た野心の有る人に就て考へて見るに、其の人は何か位を望んで居つたのに、夫れが得られなか

つたので、其の失敗の爲めに苦んで居る、然し其の人の云ふ所によれば、彼れを苦める所のものは其の傲慢でもなければ、虚榮心でもない、別に苦む理由があると、夫れは左樣であらうが、併しながら人は能く知つて居る、彼の人が何の利害も感じない外の場合ならば、此等の理由は彼の人に取りて大した効力はあるまいと。病人に取りても同じ事で、自分が世話を受けて、氣の毒がつて居る

所の人々が、若し他の人を看護して、疲れて居るとしたならば、彼の病人は矢張左迄それを苦にすると思はれやうか。

嗚呼此等の人々の嘆は、自己の心の傾向に、反對する事柄より起れる、自然の反情の外に、何の理由もないと云ふ、明瞭な証據になると思はれる

此の故に我等が若し斯の如き缺點、若くは之れに類する缺點に、陷るまいとするならば、何時も

堪忍して、如何なる原因より來れる苦みも、氣の毒も、之れを忍耐して、凌がねばならぬ。

第卅二章　我等の求め得たる德を以て我等に滅亡の機會とならしむる爲めに惡魔の最後の謀計

狡猾にして惡逆なる敵は、我等の求め得たる德に就ても、其の謀計を回らして、我等を誘はうとするのである。彼れは之れを以て、我等に罪の機

會としやうと務め、之れが爲めに彼れは、我等を
して、此等の德に滿足せしめ、或は自惚しめて自
負心に導き、而して我等を傲慢と虛榮心とに陷
れるやうに爲るのである。

此の危險を避ける道は、始終我等が自己の事を能
く知り、虛心平氣を以て戰ふにある。我等は無何
有者である。何も知らず、何も爲し得ず、我等の
固有の物は缺點と淺間敷とのみである、我等の受

くべきものは、永遠の罰ばかりであると、思ひ込
まねばならぬ。

一び此の眞正の原理に、精神を固めた上は、如
何なる觀念が、我等の心に浮んでも、又た如何な
る事が起つても、決して之れに離れてはならぬ。
如何なる思念が外より來るとも之れを怪み、敵の
如く做して、若し不幸にも其の指揮に從ふならば
最う夫れで結局。我等は負傷するに決つてある。

而も致命傷を受けるかも知れぬと思はねばならぬ

我等の無何有者である事を、能く知る修業するには、左の方法が大に益となるのであらう。

我等は自己の上、或は己か事業の上に、氣を止る度毎に、我等本來の性質如何、即ち神より受けた所によらずして、己れ自己は如何なるものであるかを省み、己が固有の物の價値を以て、己が價値を量らねばならぬ。

試に我等が地上に生存する以前には、如何なるものであつたかを看よ、永遠の深き淵に沈んで居つて、全く無いものであつた。然るに世に生れ來るには、自ら何をも爲さず、否な何も爲る事は出來ぬものであつた。

幸に神の恩惠によつて生存するやうに成り、神は絶間なき攝理を以て、時々刻々我等を保存して下さる以上、我等自己は無何有者でなくして何で

あらうか。夫れならばこそ、神が一刻でも手放したまふたならば、其の萬能の聖手より造出された所の、本來の無に忽ち歸して了ふのである。

然れば我等本來の生存に於て、自己固有の物のみに止まつて考ふれば、自ら尊ぶ理由も、他に尊ばれ度と思ふ理由もない事は明らかである。

又た聖寵と善業との恩惠に就ては、若し我等が自然の儘にして、神の祐を蒙らぬならば、我等固

有の力を以て、眞個に勳功と成る事業は、何を行ふ事が出來やうか。

其の上に又た我等の既往の罪と、神の憐み深き聖手が、差止て下さらねば、如何なる過失に陷るであつたらうかと云ふ事を考へるならば、又た此等の罪を日々、年々、種々の惡き癖が相互に結合ひ、引合はして居る方面より、數へ立て見るならば、實に限なきほど積累つて、我等自己では一種

の惡魔になつたであらうかと悟るであらう。

故に我等は神より、其の全善の功德を奪ふ責を受くる事なく、却て神に始終一致する爲めには、日に增し自己を淺間敷ものと思ふやうに力めねばならぬ。

次に我等自身を斯く評價するのが、正當であるやうに氣を附けねばならぬ。然うでなければ、夫れが却て我等の大害になるであらう。

假令盲目ででもある人よりは、我等は自分の淺ましさを數倍と能く認めて居つても、若し知て居る價額以上に、人から尊重せられん事を望むならば、彼れに勝れた凡ての得點を失ふて、彼よりも尙ほ一層盲目になるであらう。

夫れ故に我等の淺間敷と、無何有者である事とを知るを以て、敵を退けて神の聖意に適はんと欲すれば、啻に我等は如何なる惠も受るに足らず、

都ての禍を受くべきものであると、己れ自ら思ふばかりでは足らず、尙ほ其の上に人にも斯く思はれる事を好まねばならぬ。我等は世の譽を嫌ひ、輕蔑を喜び、總て他人の厭ふ事を行ふ機會を捉へねばならぬ。

此の聖なる修業を續ける爲めには、尙ほ又た人の批評を頓着せぬやうに爲ねばならぬ。併しながら此の無頓着が、唯だ謙遜の務を修業する一の目

的なら宜いが、若しも之れに反して、夫れが一種の自負心、或は隱れてある傲慢心より出でゝ、他の說を輕んじ、若くは之れを少しも省みぬとの、空な口實によるものであるならば、然うは云はれぬ。

若し我等が神より蒙りたる何かの長所に就て、他が善事に對して與ふる同情、又は賞讃を受けるやうな事があるならば、能く己が身に省みて、愼

んで居らねばならぬ。眞理と正義との道より遠からずして、却て思念を神に向け、心の底より斯う云はねばならぬ「主よ、我れをして主に歸すべき榮譽賞讃を奪はしむるなかれ、我が神よ、名譽と光榮とは主に歸すべく恥辱は我れに歸すべし」と、而して心の中で、我等の賞讃の目的たる神に語り續けて、斯う云はねばならぬ「我が主よ、主と主の業との外には、善きものあらざるに、爭て人が

我れを善しと思ふべき」と、斯て主に歸すべきものを歸すれば、我等は、敵を退け、神の方面より、益す大なる賜、愈よ大なる恩惠を、戴けるやうに成るに相違ない。

若し我等の善業の記憶が、我等を虚榮心の危險に逢はすならば、直に之れを己れの業と思ふよりは、寧ろ神の業として考へねばならぬ。其の時は善業に對して斯う云ふべきである「否な我れは人

に思はゝ所の如きものにあらず、汝等は我れに信ぜしめんとすれど、我れによりて存在するものに非ざるなり、我れは汝等の眞正なる原動者にあらず、夫れは仁慈なる神なり。汝等を造り、養ひ保てるものは神なり。神の恩寵なり。故に神のみを汝等の眞正、且元始なる作者なりと認めざるべからず。感謝すべきものは神なり。我れも亦た神に光榮を歸せんと欲するものなり」と

其の次に我等の行ふた業には、不完全な所が二つある事を考へて見ねばならぬ。先づ第一は之れを目論見、之れを行ふが爲めに、我等に與へられた光明と恩寵とに、應ずる事は寔に僅である。次に其の業は極て不完全にして、我等が之れを行ふた時、有つべき純潔な意向と熱誠と神速とに、遠く懸隔つて居るのである。

此の故に若し我等が、眞面目に之れを考へたな

らば、此の業は我等に自惚心を起さす所でなく、却て謙る資と成るであらう。何故ならば神より受くる所の純潔且完全なる恩寵は、我等が之れを用ひて實行する時には、終に我等の缺點に傷けられるやうになるのは、否むべからざる事實である。

又た次に我等の業を、聖人及び神の忠僕の業に比べて見れば、我等の最も良き善業も、甚だ價値

の少き事を明かに認むるであらう。

尙ほ其の次に耶蘇基督が、其の御生涯及び御苦難の玄義の中に、行ひたまふた業に比べたならば縱へ此の業を神たるものゝ外に考へ、單に此の業の行はれた純潔なる愛の心に就て、業其物を考へて見ても、我等の業は實に價値のないものであると云ふ事が分るであらう。

終に若しも我等の精神を、神の限なき威稜の玉

座に引揚げ、之れに事ふる爲めに盡すべき、凡ての事柄を考へたならば、如何なる善業を行ふても自負心を起す所か、却て大に恐入らねばならぬ事を、尙ほ一層明瞭に認むるであらう。故に如何なる場合にも、又た如何なる尊き業を行ふても、始終神に向て、斯う云はねばならぬ「主よ我れは罪人に外ならされば我れを憐みたまへ」と。

尙ほ勸告す、神が我等に與へて下さつた賜を、

容易口外してはならぬ、此の點に就て愼まねば、何時も神の聖意に適はぬ。夫れは左の例によつて分る。

一日耶蘇が幼き子供の姿を假り、通常の人のやうになつて、敬虔な人に現れたまふた。其の時に其の敬虔な人は遠慮なく、天使祝詞を唱へられん事を願ふたが、耶蘇は直ぐ之れを唱へ始め「慶し聖寵充滿る瑪理亞、主爾と共に在す、爾は女の中

にて祝せらる」と唱へ、次の語に於て、御自分を賞讃するのを好まず、此所で止まりたまふたから其の敬虔な人が繼ける事を願ふた所が忽ち消失たまひ、敬虔な人の心に、得も云はれぬ慰藉を殘すと同時に、今示された謙遜の模範に就て、感心の念を起さしめたまふた。

然れば我等は何事に於ても遜謙を學び、神の尊前では如何ほど虚無ものであるかを心得ねばならぬ。

是れぞ萬の德の基である、我等が曾て無かつた時、神は我等を無より造出したまふたのである。今や我等は神の庇陰で、在るものとなつたから、神は「我等本來無也」と云ふ自覺を以て靈生の基礎とする事を望みたまふのである。此の自覺が深ければ深いほど、靈生の度が高くなる。我等が淺間敷の地盤を、深く堀れば堀るほど、建築者なる神

は此の深き根堀の中に、充分建物を支ふべき堅固なる根石を据えて下さるのである。併し我等は充分に深く堀り行く事が出來ると思ふてはならぬ。却て若しも人に無限と云ふべきものが、何か有るを得るとすれば、夫れは取りも直さず淺間敷さの程である。

能く之れを自覺して、之れによつて宜しく行へば凡ての善事が、我等の爲めに湧出るであらう。

若しも之れを自覺せざれば、假令聖人の凡ての業を行ふても、神の事を始終思込んで居つても、唯だ淺間敷無何有者に過ぎぬのである。

嗚呼我等をして地上には幸福ならしめ、天上には光榮ならしむる覺識は實に貴重なるかな。嗚呼暗冥より發射して靈魂に輝を與ふる光なるかな。嗚呼我等の淺間敷中に輝く知るべからざる歡喜なるかな、嗚呼我等に萬事を司らしむる虛無の知覺

なるかな。

此の點に就て話が盡きぬのである。若し我等が神に光榮を歸する事を望むならば、自分を咎め、又た人からも咎められる事を望め。若し神を我等の身に於て賞揚げ、我等を神に於て高めやうと望むならば、凡てのものと共に謙り、又た凡てのものに屈服せねばならぬ。神を失ふた時、再び之れを求めやうと思ふならば、決して高ぶるな、却て

神は去りたまふであらう。故に出來る丈け謙れ、神は自ら我等を尋ね、且つ抱上げたまふであらう我等が其の尊前に深く謙る程、又た人に卑められ嘲にせられるを好む程、神は愛を以て我等を歡迎し、寵を以て我等を抱締めたまふであらう。

神が我等と一致する爲めに、賤めを以てしまふ事は、神が與へて下さる大なる恩惠である。實に我等の身に餘る恩惠であると思ふて、千萬感謝せ